

日本音楽知覚認知学会平成27年度秋季研究発表会プログラム(詳細版)

会場: ヤマハ音楽振興会本部 スペースM

12月5日(土)

セッションNo.	講演No.	開始時刻	終了時刻	講演者	タイトル	概要
理事会		10:00	12:30			
開会挨拶など		13:00	13:05			
セッション1 座長: 安田晶子(東京女子大学)	講演1	13:05	13:30	河瀬 諭(相愛大学, ヤマハ音楽振興会ヤマハ音楽研究所), 小川純一(ヤマハ音楽振興会ヤマハ音楽研究所)	音楽のグループ学習が子どもの発達に与える影響	本研究の目的は、音楽レッスンが子どもの発達(社会性など)に与える影響を検討することである。そのために、ヤマハ音楽教室に通う生徒を対象として質問紙調査を行った。
	講演2	13:30	13:55	川井春輝(金沢工業大学大学院・工学研究科), 江村伯夫, 山田真司(金沢工業大学・情報フロンティア学部)	サクソ演奏の音響特徴量と個人性知覚との関係について	サクソ演奏に含まれる音響特徴量と奏者の個人性知覚の関係を調査した。各種音響特徴量を置換した音刺激について一対比較法による聴取実験を行った結果、F0の変動パターンとスペクトルが個人性知覚に強く寄与していることが示唆された。
	講演3	13:55	14:20	宮丸友輔, 江村伯夫, 山田真司(金沢工業大学)	ドラムス演奏におけるグルーブ感の調査	ドラムス演奏のグルーブ感は、縦ノリ、横ノリ、前ノリ、後ノリの4種に分類される。本研究では、スネアドラム、バスドラム、ハイハットシンバルの3種の楽器を対象とし、これらの打叩時刻やアクセント位置といった演奏上の操作と先の4種のグルーブ感との関係について定量的に調査している。
	講演4	14:20	14:45	亀川 徹, 丸井淳史(東京藝術大学・音楽学部)	音楽素材の違いが空間印象に与える影響について	空間音響における様々な物理量と音楽素材の違いによって空間印象がどのように変るかについて調べた。その結果、空間の容積、室形状、吸音率を変化させることで得られる印象は音楽素材によって異なる事が示された。
休憩(10分)		14:45	14:55			
セッション2 座長: 長嶋洋一(静岡文化芸術大学)	講演5	14:55	15:20	◎舟橋 毅, 進矢正宏, 岡野真裕, 工藤和俊(東京大学大学院・総合文化研究科)	ドラムスティックを用いた両手交互タッピング動作時の筋活動およびキネマティクス特性:ドラマーと非ドラマーの比較	ドラムなどの楽器演奏でみられる両手交互タッピング動作時の、上肢筋活動・キネマティクスを測定した。非ドラマーでは、左手で叩打を行った後に撓側手根伸筋の活動が増加する局面がみられたが、ドラマーではみられなかった。
	講演6	15:20	15:45	◎小幡哲史(電気通信大学・情報システム学研究科, ヤマハ音楽振興会 ヤマハ音楽研究所), 小川純一(ヤマハ音楽振興会 ヤマハ音楽研究所), 木下 博(大阪大学大学院 医学系研究科)	電子オルガン演奏の脳機構 - fMRIを用いた実験的研究 -	電子オルガン演奏は手と足で鍵盤を操作し、特徴的な音高制御を行っている。本発表は、足の運動や手足の協調運動と聴覚との関係について、電子オルガン奏者を対象にfMRIを用いた実験から、特異的な脳機構について報告する。

	講演7	15:45	16:10	◎田野崎はるか, 進矢正宏, 岡野真裕, 工藤和俊(東京大学大学院・総合文化研究科)	両手のリズム動作の制御における拍子構造の影響	タッピング課題などのリズム運動において、タップ数やinter-tap interval(ITI)などの身体的負荷が全く同じでも、聴覚合図を与えるタイミングを変えると、動作のばらつきが大きくなるなど振る舞い方に変化が生じる。この事象の原因を明らかにすることを目的とした研究である。
休憩(15分)		16:10	16:25			
	チュートリアル 司会: 小幡哲史(電気通信大学)	16:25	17:25	木下 博(大阪大学)	音楽演奏の運動解析について	演奏のパフォーマンス向上や演奏障害の原因を探る研究では身体への運動ストレスを客観的に評価することが必要となる。その際には、何らかの手法で身体の動きを定量化する方法(temporal・kinematics法)、さらに運動の生成源である力を求める方法(kinetics法)がよく使われる。いわゆる“バイオメカニクス(生体力学)”的手法と呼ばれる運動解析の一連の方法がそれに当たる。昨今では、それらを比較的簡単に計測できる機器の開発とPCの高機能化が進み、バイオメカニクス初心者にも大量のデータを組み込みのソフトウェアで瞬時に計算・解析処理することが可能となってきた。その例がモーションキャプチャー、筋電計測、地面反力計測などであり、すでに完全にシステム化されて市販され多くの大学・研究機関で使用されている。本発表では、これらの測定システムを含めてバイオメカニクス機器の音楽科学研究への活用について我々の経験を中心に解説を試みます。
休憩(10分)		17:25	17:35			
表彰式		17:35	18:00			
懇親会		18:30		会場: ホテル プリンセスガーデン 1Fレストラン「フォーシーズン」		

12月6日(日)

セッションNo.	講演No.	開始時刻	終了時刻	講演者	タイトル	タイトル
セッション3 座長: 正田悠(同志社大学)	講演8	9:30	9:55	◎飯田州人(九州大学大学院・芸術工学府), 中島祥好, 上田和夫, Gerard B. Remijn(九州大学大学院芸術工学研究院), 芹澤幸宏(本田技術研究所)	空隙の長さや頻度とが音楽信号に与える違和感についての精神物理学的研究	カーラジオに混入するノイズの主観的なひずみ感を物理量のみから推測することを最終目的として、本研究では2種類の音楽演奏音に複数の空隙を挿入した際のひずみ感を、精神物理学的手法を用いて測定し定量化を試みた。
	講演9	9:55	10:20	◎饗庭絵里子(電気通信大学), 松井淑恵(和歌山大学)	ピアニストの短期間の練習過程から見る演奏方略の違い	演奏技術が同等である演奏家であっても、視覚(楽譜)情報を優先する演奏家と聴覚(音)情報を優先する演奏家がいることが経験的に知られている。このような演奏方略の違いを短期間の練習課程を観察することで明らかにすることを試みた。

	講演10	10:20	10:45	小林佳子(兵庫教育大学大学院連合学校(岡山大学所属)・教育学研究科), 小川容子(岡山大学大学院・教育学研究科)	ピアノ初見視奏の予見時における楽譜上の視線移動	アイマークレコーダを用いた実験により, ピアノ初見視奏の予見時という限られた時間内の, 楽譜の注視箇所や視線移動の仕方を明らかにした。実験では, 注視箇所を取り入れた楽曲(新曲)を作成し, 楽譜上における視線の位置, 視線移動の特徴を検討した。
休憩(10分)		10:45	10:55			
セッション4 座長: 川上愛(玉川大学)	講演11	10:55	11:20	星野悦子(上野学園大学・音楽学部)	音楽作品の聴取から知覚される混合感情 ~ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの比較~	音楽作品の聴取から人に知覚される感情(perceived affect)には, 単独の「楽しさ」、あるいは「悲しさ」などばかりでなく, valence次元で対比される二つの感情が混じりあった混合感情(mixed emotions)が存在し, 聴きとられていることが, クラシック音楽による評定実験から明らかになった。
	講演12	11:20	11:45	谷口高士(大阪学院大学・情報学部), 小川純一(ヤマハ音楽振興会・ヤマハ音楽研究所)	音楽聴取時の自律神経系指標と主観的な心地よさ評価の時系列的比較(2)	実験参加者にテンポの異なる12曲の現代音楽と古典音楽のピアノ演奏を2分間ずつ聴取させ, 指尖脈波の計測と心地よさの主観評価を連続時間で行った。楽曲ごとに, 指尖脈波より算出した複数の自律神経系指標と主観評価の時系列的変化, および, その平均値を比較した。
	講演13	11:45	12:10	棚瀬廉人, 荒井美希, 関根鈴花(ヤマハ(株))	楽音聴取傾向のデータ化	感性をデータ化する取組として, 聴取傾向の違いを分析した事例を紹介する。音質の好み, 楽器開発経験, 音楽演奏経験で生じる評価の差異を, 主観実験の評点だけではなく, 評価構造や音響特徴量と関連付けて考察する。
休憩(70分)		12:10	13:20			
セッション5 座長: 羽藤律(放送大学)	講演14	13:20	13:45	蓮尾絵美(青山学院大学・教育人間科学部/日本学術振興会), 中島祥好(九州大学大学院・芸術工学研究院/応用知覚科学研究センター), 若杉倫子(九州大学大学院・芸術工学府), 藤岡拓也(九州大学大学院・芸術工学府)	区切り音の長さが時間間隔の知覚に及ぼす影響: ピアノ音を用いた検討	リズムの基礎となるような, 次々に鳴る二つの音の始まりによって示された時間間隔の知覚には, 音自体の長さも影響することが先行研究で明らかになってきた。本研究では, ピアノ音やピアノ音を模擬した合成音を用いた場合には, 音の長さの効果が認められる場合もあるものの, 全体としては弱まることを示す。
	講演15	13:45	14:10	佐藤正之(三重大学大学院・医学系研究科), 小川純一(ヤマハ音楽振興会), 時田智子(御浜町健康福祉課), 中口紀子(紀宝町包括支援センター), 仲尾貢二(紀南病院脳神経外科), 田部井賢一, 木田博隆, 富本秀和(三重大学大学院・医学系研究科)	音楽体操は高齢者の認知機能を改善する: 御浜・紀宝プロジェクト	認知症の非薬物療法としては運動の有効性が確立している。地域在住健常高齢者を対象に, 音楽伴奏の付いた体操による介入を一年間行い, 認知機能の変化を調べた。その結果, 音楽伴奏のない群に比し, 体操の内容は同じであっても認知機能により高い改善効果を認めた。
	講演16	14:10	14:35	靱山陽子(名古屋大学・情報文化学部)	特殊モーラの音響に見られる歌詞付けの反映——促音の場合——	日本語の声楽曲では基本的に1モーラに1音を割り当てるが, 特殊モーラは前接の自立モーラと合わせて1音を割り当てる場合もある。今回は促音についてこれらの歌詞付けの違いが歌唱の音響にどのように反映されるのか, 音声分析ソフトウェアPraatを用いて分析した。
閉会挨拶など		14:35	14:40			

講演時間: 発表18分, 質疑応答5分, 交代2分

◎は, 日本音楽知覚認知学会研究選奨選考対象者を示しています。